

December 21, 2025

愛の神

ルカ 2:4-7

2:4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

2:5 身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。

2:6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、

2:7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

私たちはアドベントに四本のキャンドルを順に灯してきました。最初のキャンドルは「希望」、次は「平和」、三本目は「喜び」、そして、四本目のキャンドルは「愛」を表わしています。「希望」、「平和」、「喜び」、「愛」。どれも、私たちになくてならないものです。そういったものがなくても、動物は生きていけるかもしれませんが、人間はそういうわけにはいきません。「希望」がなければ生きる目的を失い、「平和」がなければ生きる支えを失い、「喜び」がなければ生きる力を失います。そして何よりも「愛」がなければ、生きる意味を失うのです。

聖書は「愛」は神から与えられ、「愛の神」はその「愛」を「救い主」がベツレヘムの町でお生まれになったことによって表わしておられると教えています。ですから、「ベツレヘムのキャンドル」は「愛のキャンドル」と呼ばれるのです。

では、ベツレヘムの町での救い主誕生に表された神の愛とは、どのような愛なのでしょう。

一、永遠の愛

それは第一に「永遠の愛」です。イエスがベツレヘムでお生まれになったのは、偶然ではありません。それは、神のご計画であり、預言の成就でした。ヨセフが出産間近のマリヤを連れてベツレヘムに向かったのは、ローマ皇帝が人口調査の命令を出したからでした。ルカ 2:1-2 にそのことが書かれています。

「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。」アメリカでは 10 年ごとに「人口調査」が行われます。その時点で自分の住んでいるところで登録すればいいのですが、聖書に書かれているユダヤの人々に対する人口調査では、それぞれが、自分の家系にしたがって、その出身地に帰って登録しなければなりません。ナザレからベツレヘムまではおよそ 100 マイル。今ではハイウェイが整備されていますので、車で 2 時間もあれば行けますが、身重のマリアがろばに乗って行くには、一日 20 マイルがせいぜいだったでしょうから、すくなくとも 5 日、途中で休憩しながらだと、一週間はかかったでしょう。やっと、ベツレヘムに着いたときには、宿屋は一杯で、マリアは家畜小屋で出産しなければならなかったのです。

しかも、この人口調査は統計をとるためのものではなく、ローマ帝国がユダヤの人々を皇帝の支配のもとに置き、人々から税金を取り立て、労役を課すためのものでした。聖書は、救い主がお生まれになった年代、イエスが教えを始められた頃、そして、十字架にかかれた時をはっきりと記しています。それは、救い主が世に來られたことが歴史上の出来事、事実であ

ることを示すためです。私は、メッセージの中で聖書の時代背景や年代のことをよく話しますが、それは、聖書に書かれていることが、歴史の事実であることを知ってもらいたいからなのです。けれども、聖書に書かれている歴史事実は、ユダヤの人々にとって、残酷なものでした。本来、救い主は「ユダヤの王」です。「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」（イザヤ 9:6）と呼ばれるお方、神の民に平和と繁栄をもたらすお方です。ところが、ユダヤはローマ帝国の属国となっていて、この時お生まれになった救い主は、属国の民という不名誉な身分でヨセフ、マリアとともに登録されたのです。

イエスがベツレヘムでお生まれになったのは、ローマの権力によって強制されてのこのように見えます。しかし、実際は、神がローマの権力を用いて、ガリラヤにいたヨセフとマリアをベツレヘムへと導いたのです。それによって、ヨセフがダビデの子孫であり、救い主がダビデの出身地であるベツレヘムで生まれるとの預言が成就するためでした（ミカ 5:2）。神の権威は、ローマ皇帝の権力に勝るもの、その上にあって、歴史を導いているのです。

ユダヤの人々は自分たちに注がれた神の愛と真実に逆らい、外国に滅ぼされ、ダビデ王朝は、ダビデから 21 代目のゼデキヤ王で終わりました。しかし、神の愛は、人間の不真実を超えて強く、神がダビデ王にダビデの王朝は、ダビデの子として生まれる救い主によって永遠に続くと言われた言葉は、ダビデから千年近くたっても変わらず、神は、ダビデへの約束をベツレヘムの村で成就してくださったのです。

人の愛は移り変わります。周囲の反対を押し切って結婚した相手と、何年もしないうちに離婚してしまうなどといったこと

が、残念ながらあります。“First Love Forever”（最初の愛、いつまでも）というわけにはいかないのが、人の世の現実です。しかし、神の愛は違います。神は言われます。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに真実の愛を尽くし続けた。」（エレミヤ 31:3）人が神との約束を忘れても、神は人との約束を忘れません。神は、永遠の愛、変わらない愛、真実な愛で、私たちを愛しておられます。

二、へりくだりの愛

次に、神の愛は「へりくだりの愛」です。これは変わった言い方ですが、本物の愛にはかならずへりくだり、謙遜が伴います。「愛の賛歌」と呼ばれるコリント第一 13 章には「愛は自慢せず、高慢になりません」（4 節）とあります。また、ローマ 12:16 には、「互いに一つ心になり、思い上がることなく、むしろ身分の低い人たちと交わりなさい。自分を知恵のある者と考えるはいけません」と教えられています。

愛は、相手と同じ立場に立つことから始まります。それは、持っている人が持っていない人を見下げて施しをするといったもの、知識のある人がそうでない人を見下して「教えてやろう」とすることではありません。力のある人が弱い人に「駄目じゃないか」と言って「お説教をする」というものでもないのです。たとえ相手が自分とは違った考えを持ち、それに従って行動していたとしても、その人の立場に立って、その人の考えや行動を理解しようとする、それが愛です。

イエスは、じつに、この「へりくだりの愛」で私たちが愛してくださいました。ピリピ 2:6-8 にこう書かれています。「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨て

られないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」神の御子であるお方が人となられる。これ以上のへりくだりはありません。しかも、イエスは、人としても、最も低く、貧しい者となられたのです。ルカ 2:6-7 には、「マリアは月が満ちて、男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた」とあります。2:11-12 には、「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つめます。それが、あなたがたのためのしるしです」とありますが、「この方こそ主キリストです」という宣言と「布にくるまって飼葉桶に寝ている」という言葉は、なんとも不釣り合いです。神の御子であるなら、王宮に生まれ、特別なクリブに寝かせられて当然なのに、この尊いお方が、人の住むところではない、家畜小屋の飼葉桶に置かれたというのです。しかし、それこそが神の愛の「しるし」なのです。

パウル・ゲルハルトと J. S. バッハの作った「馬槽のかたえに」（新聖歌 83）では、こう歌われています。

きらめく明星 馬屋に照り わびしき乾草 馬槽に散る

黄金のゆりかご 錦の産着ぞ 君にふさわしきを

この世の栄を 望みまさず われらに代わりて 悩み給う

貴き貧しき 知り得しわが身は いかになたえまつらん

「貴き貧しき」とはじつに、イエスのご生涯のすべてを言い表わしている言葉です。イエスが貧しくなられたのは、私たちに豊かな命を与えるためでした。イエスはご自分を低くし、貧し

くし、ついに十字架の死にまで至られました。イエスは求める者にご自分を与え続け、ついに十字架の上でご自分を与え尽くされたのです。神の愛は、自らを低くし、貧しくし、他に与える愛です。私たちは、この愛によって生かされ、また、この愛に生きることによって、ほんとうに幸せになれるのです。

三、形をとった愛

第三に、神の愛は形をとった愛です。「神の愛といっても、漠然としていて、つかみどころがない」と言う人も多いでしょう。確かに、「愛」という言葉は、男女の愛にも、肉親の愛にも、また、「愛国心」といって、国家への忠誠を言うときにも使われます。タバコ好きの人は「愛煙家」と呼ばれますが、この場合の「愛」は「ものごとにこだわる」ということで、良い意味ではありません。「愛」と言っても人によって定義が違います。神の愛と言われても、どう捉えたらいいか分からない。そんな気持は、誰しも持ったことがあるでしょう。お互いにそうした気持ちを分かりあえますが、神は、私たちのそうした気持ちを誰よりも、もっとよく理解してくださっています。

それで、神は、ご自分の愛を形をもって表わされたのです。ベツレヘムの飼葉おけに寝かせられた赤ん坊を神の愛の「しるし」、神の愛の具体的な「姿」、「形」として、私たちに与えてくださったのです。さきほど引用したピリピ 2:6 に「キリストは、神の御姿」と言われていました。聖書の別の箇所でもキリストは「見えない神のかたち」（コロサイ 1:15）と言われています。イエスは「見えない神の見えるかたち」です。ベツレヘムの町に、赤ん坊となって生まれたイエスは、ナザレの村で育ち、ヨルダン川でバプテスマ（洗礼）を受け、ガリラヤの各

地で人々を教え、病気の人たちを癒やしました。人々はその教えを聞き、その奇蹟を見ました。イエスの足跡は、イスラエルの至るところに残っています。

神の愛は、漠然としたものではなく、一人の人、イエス・キリストとなりました。弟子たちは、このお方を目で見、手で触って知り、神の愛を確認しました。今の私たちは、最初の弟子たちと同じようにイエスを肉眼で見ることはありませんが、神は、聖霊によって、イエス・キリストを歴史の中に認め、聖書の中で知り、祈りの中で感じ、日常生活の中で体験できるようにしてくださいました。このクリスマスに神の「愛のしるし」イエス・キリストをしっかりと見つめ、この愛を受けとる者でありたいと思います。

私は最初に「希望」や「平和」、「喜び」や「愛」がなくても動物は生きていけるかもしれません、と言いましたが、いつも人間に触れている家畜やペットは、人間の愛情を感じ取り、それに応えてくれます。人間が可愛がってあげれば、飼い主の感情を理解し、飼い主が落ち込んでいるときに慰めてくれます。動物でさえ、飼い主の愛を受け止めることができるのなら、人間が神の愛を受け止められないわけがありません。

きょうの箇所「宿屋には彼らのいる場所がなかった」（7節）とあります。“No Vacancy”というわけですが、私たちの心に、イエスを受け入れる余地がないとしたら、それほど悲しいことはありません。信仰とは、イエスを心に、生活に、人生に迎え入れることですから、「宿屋には彼らのいる場所がなかった」というのは、信仰を持とうとしない人の心のことを言っているように思います。私たちに必要な希望、平和、喜び、そして愛はイエス・キリストから来るのです。キリストは

「愛」そのものです。愛の神に心を開き、イエス・キリストのために私たちの心に場所を用意しましょう。そのとき、希望、平安、喜び、愛が私たちのものとなるのです。

（祈り）

まことの神さま、多くの人は「神」を漠然とした、とらえどころのないものと考えています。しかし、あなたは、イエス・キリストによってご自分を表わしてくださったお方です。私たちは、あなたが希望の神、平和の神、喜びの神、そして愛の神であることを知っています。私たちに必要な希望、平和、喜び、愛は、実に、あなたご自身であり、イエス・キリストご自身です。このクリスマスに、私たちを、あなたの愛によって生きる者としてください。救い主イエス・キリストのお名前によって祈ります。